神戸女学院大学論集　第66巻第２号　Kobe College Studies Vol. 66 No. 2（December 2019）pp. 79-93

# 知識人の選択と正義のアポリア

## ― 有島武郎の「宣言一つ」をめぐって ―

譚　　仁　岸

**The Choice of Intellectual and Aporia of Justice:**
**Based on *An Announcement* by ARISHIMA Takeo**

**TAN Renan**

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 客員研究員
広東外語外貿大学 日本語言語文化学院 准教授
連絡先：譚　仁岸　952512279@qq.com

## 要　旨

本稿は有島武郎が一九二二年に発表した「宣言一つ」及び関連テキストを再読することを通して、「知識階級」と「第四階級」の階級移動の問題を再検討し、新たな理論的資源を援用して知識人の持っている「文化資本」の権力性と階級性を大正時代の文脈に沿いながら論じたものである。知識階級の啓蒙的暴力を反省することにおいても、過度な政治化と過度な脱政治化との間の選択においても、複数の価値的衝突と正義のアポリアに面する際の政治的実践においても、有島武郎にはまだ批判的可能性が内蔵されている。それは今日において政治思想の視点からも思考し続けるに値するものである。



**キーワード：**有島武郎、知識階級、文化資本、正義、アポリア



## Abstract

The aim of this paper is to reconsider questions between intelligentsia and proletariat, and issue of intellectual representation put forward by ARISHIMA Takeo by reviewing his work *An Announcement* in 1922 and other relevant comments. By combining new theories, this paper would interpret the power and class character of cultural capital that intelligentsia had. It will emphasize that ARISHIMA Takeo had an impressive critical potential on three aspects: the reconsideration on the enlightenment violence of intelligentsia, the choice between excessive politicization or de-politicization, and the political practice when facing the conflicts among the different justice value, which is particularly relevant from the viewpoint of political thought today.



**Keywords:** ARISHIMA Takeo, intelligentsia, cultural capital, justice, aporia

## 1．はじめに

有島武郎（一八七八〜一九二三）が総合雑誌『改造』（一九二二年一月号）に発表した「宣言一つ」という短文は、労働運動における知識人の指導的役割と自らの階級移動の可能性を強く否定し、図らずも一つの論争を引き起こしたテキストとして、大正文学史・思想史に記憶されている[1)]。そして、「宣言一つ」についても、「宣言一つ」論争についても、すでに多くの研究が多面的になされてきた[2)]。論者たちによって抽出されたテーマは、例えば「革命論と芸術論」、「知識人と労働者」、「代行と表象」などが典型的であるが、本稿はそれらの議論を踏まえた上で、別の視座から「宣言一つ」の問題をめぐる有島の幾つかの評論作品を再読し、この作家の社会思想に提起された命題の今日的な意味を改めて吟味してみたい。

## 2．知識階級と第四階級

まず有島の「階級移動」に関する説について見てみよう。有島は「宣言一つ」の後半部において、妥協を許さない激越な語調で自分と労働者階級との截然たる絶縁を、次のように語っている。

> 私は第四階級[3)]以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人である。私は新興階級者になることが絶対に出来ないから、ならして貰おうとも思わない。第四階級のために弁解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切った虚偽もできない。今後私の生活が如何様に変わろうとも、私は結局在来の支配階級者の所産であるに相違ないことは、黒人種がいくら石鹸で洗い立てられても、黒人種たるを失

1）代表的な同時代評としては、小説家・評論家広津和郎の「有島武郎氏の窮屈な考え方」、文芸評論家片上伸の「階級芸術の問題」、社会主義者堺利彦の「有島武郎氏の絶望な宣言」、経済学者河上肇の「個人主義と社会主義」が挙げられる。

2）谷沢永一著『大正期の文芸評論』（塙書房、一九六二年）に、広津和郎、片上伸、堺利彦、室伏高信、青野季吉などをはじめとする諸者の評論が列挙されている。また、安川定男の「「宣言一つ」をめぐる論争」（『国文学解釈と鑑賞』、一九七〇年六月号）において、平林初之輔、宮島新三郎、加藤一夫、福士幸次郎、藤原鉄乗、近松秋江、西島藤朝、江口渙、小島徳弥、千葉亀雄の文章が挙げられている。戦後の有島研究の中で本稿との関連性から見れば、安川定男「「宣言一つ」の問題」（『有島武郎論（増補版）』所収、明治書院、一九六七年）、森山重雄「有島武郎における生の二律性認識」（『実行と芸術』所収、塙書房、一九六九年）、伊豆利彦「知識人の問題――「宣言一つ」前後」（『日本文学』、一九七九年一月号）、栗田廣美「「宣言一つ」の可能性――考える「場」についての序説」（『有島武郎と社会』所収、有島武郎研究会編、右文書院、一九九五年）、宗像和重「「階級」と「ハビトゥス」」（『有島武郎と社会』所収、有島武郎研究会編、右文書院、一九九五年）、佐藤泉「政治と文学　あるいは表象の不・可能性」（『戦後批評のメタヒストリー　近代を記憶する場』第四章、岩波書店、二〇〇五年）などがある。

3）第四階級とは、第一階級の王・諸侯、第二階級の貴族・僧侶、第三階級のブルジョアジーに対していう言葉。無産階級、労働者階級、プロレタリアートともいう。有島の用法では、「無学無産」の都市労働者のことを指している。

わないのと同様であるだろう。従って私の仕事は第四階級者以外の人々に訴える仕事として始終する外はあるまい[4)]。

上記の有島の「時代錯誤」的な表現は、すぐ同時代人から厳しく論難されてしまった。例えば、本間久雄はこのように批判している。「ブルジョアとプロレタリヤとの区別は、決して白人種と黒人種というようなその人種の先天的又は本質的区別ではなくて、単に貴族とか平民とかいうような、人為的社会制度が醸し出した、ただの第二義的な後天的区別であることはあまりに明白な事であります。……賢明な有島氏がかように明白な事柄に対して、かような謬見を抱いたということは私には寧ろ不思議に思われます」[5)]。

この「階級規定の本質主義」に対する非難は、後の論者にも引き継がれ、有島批判の決定的な標的となっていったのである。戦後批評史の文脈で「宣言一つ」論について興味深い考察を施した佐藤泉も、次のように問題を指摘している。「このように語られた「階級」は、もはや状況に応じて形成された集合意識でも、戦略的な認識でもなく、人種主義の言説と同様に、個人の身体に本質主義の言葉を刻印することになるだろう」[6)]。なぜなら、「マルクスによる「階級」も、あくまで他の階級と分離可能な差異において定義されているように、それは内的本質や不可変の自然本能に基づいたものではない」[7)] からである。有島は、「他者を代行することはできないと宣言した」階級宿命論者だと認識されている。

一見すれば、上記の批判は極めて合理的であるように思われる。特に有島の文脈を切断して一般論的に見ればなおさらである。経済概念としての階級構成は永遠に不可変的ではないし、ブルジョアジーとプロレタリアートというのも、もちろん本間久雄のいうとおり、「人為的社会制度が醸し出した」ものであり、「後天的」に形成された社会的範疇である。

しかし、そもそも有島はマルクス主義的な「階級」規定に囚われていないのである。彼は第三階級というより、知識階級の階級移動の不可能を論じている。「宣言一つ」の発表から二ヵ月後、彼はこのように解釈している。「僕が即今あらん限りの物を抛って、無一文の無産者たる境遇に身を置いたとしても、なお僕には非常に有利な環境のもとに永年かかって植え込まれた智識と思想とがある。外見はいかにも無一文の無産者であろうけれども、僕の内部には現在の生活手段として頗る都合のよい武器が潜んでいる。これは僕が失おうとしても到底失うことのできないものだ」[8)]。

これは経済力ではなく、「知識と思想」を以て階級区分の根本的な基準とする有島の独特な考え方である。つまり、知識階級は経済資本を放棄しようとしても、通念での「階級移動」が

4）初出は雑誌『改造』、一九二二年一月号。『有島武郎全集』第九巻、筑摩書房、一〇頁。本稿での有島武郎の引用はすべて『有島武郎全集』（筑摩書房、一九七九～一九八六年）を用いた。以下、『全集』巻号と頁数のみを記す。

5）本間久雄「最近の諸問題を報ずる書」『早稲田文学』、一九二二年四月。『有島武郎全集』別巻、六一六頁。

6）佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー　近代を記憶する場』、岩波書店、二〇〇五年、一六九頁。

7）佐藤泉、前掲書、一七四頁。

8）有島武郎「片信」『我等』、一九二二年三月。『有島武郎全集』第九巻、三八～三九頁。

できるとしても、教育によって身体に刻み込まれた知識・思想が離脱不可能であることを有島は鋭く意識した。これに対して、戦後の批評家平野謙（一九〇七～一九七八）はそれを「肉体の不可変性」[9] と要約し、現代の文学研究者小森陽一は、「知識や思想を媒介とした文筆活動の結果が、商品化されていく資本主義的なジャーナリズムの中では、知識や思想はそれ自体として資本になってしまう。その意味では、一度脳に記憶された（身体化された）知識を持つ以上、自分のような存在は、内的に無産者になることはできないのだ」[10] と敷衍した。

むろん、極限な生活環境、例えばアウシュビッツのような所に収容されたら、知識も思想も、身体感覚も行動様式も変わってしまうにちがいないが、有島のいう通常の状況では、長年身につけ、使いこなした知識・思想だけは財産のように一挙に失われることはまずないといってよい。有島が執拗に拘っていたのはそれであった。

有島のいう「知識・思想」は、ピエール・ブルデュー（一九三〇～二〇〇二）が提起した「ハビトゥス」[11] という概念を髣髴させる。ブルデューは主著『ディスタンクシオン――社会的判断力批判』を通して、階級間或いは階級内集団間の趣味をはじめとする諸文化要素も、構造的なヒエラルキー関係・権力関係を持っていることを究明した。一見個人的・審美的・プライベートな趣味範囲に属する文化的諸要因は、個々の階級や集団のハビトゥスを構成すると同時に、なおハビトゥスによって生み出され、固定化されていく。それは「卓越化」、「特権化」、「ステータス・シンボル」に不可分に結びつけられている。芸術作品の感受性や鑑賞方法、身体の振舞い方、物品に関する知識、食事の取り方等々の生活様式は、実は文化資本の様々な表れであり、他者との階級的区別なのである。

なお、異なる階級間の言語様式、パラダイムの違いは想像以上に大きいと思われる。「それぞれのグループは、自分達独自の言語の中で存在するだけではなく、次のようにして、自分達の世界の中に存在する。つまり、彼等は「文の体制」の中に存在し、利益や目的を具現化するのである。一つの文の体制が、もう一方を支配する。通訳不可能性は、言語間にある不透明性の概念を表したものである」[12]。無論、異階級間の意志疎通が全然できない、更に相互のコミュニケーションもすべきではない、という硬直した相対主義を弁護するつもりはないが、しかし、階級間のハビトゥスに象徴されているような差異に盲目的であれば、言葉の暴力、「啓蒙して

9）平野謙「「政治の優位性」とはなにか」（『近代文学』、一九四六年、一〇月号）を参照。

10）小森陽一「〈知識人〉の論理と倫理」『講座昭和文学史第一巻』所収、有精堂、一九八八年、二三頁。

11）ここではブルデュー訳者の石井洋二郎による解説を引用しておくにとどめる。「habitus とはそもそも「持つ」の意のラテン語動詞 habere の派生語であり、本来はある個人が備えている「外的特徴」「態度」「顔色」などを意味するが、そこから発してより一般的には「体質」「気質」「心的傾向」などの意味を持つ言葉で、要するに「ある個人が獲得し所有しているもろもろの特性・資質・傾向の総体」と定義することができる。ブルデューはこれを、個人の所有するさまざまな「性向」disposition の体系もしくは集合体として提示するのであるが、重要なのはそれが個人レベルにとどまらず、階級或いは集団全体を規定する規範システムとして、否応なく階級性の刻印を押されているということである。つまりある階級・集団には多かれ少なかれ一貫性を持った特定のハビトゥスが対応している」。ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン――社会的判断力批判』（石井洋二郎訳）、藤原書店、一九九〇年。この点については、脚注２）に挙げた宗像和重の論文に啓発された。

12）スチュアート・シム編『ポストモダン事典』（杉野健太郎／下楠昌哉監訳）、松柏社、二〇〇一年、一六七頁。

あげる」という「理性」の傲慢は悲劇的に発生するのも、歴史的な事実である[13]。

そういうハビトゥスには、有島にとって、きっと嫌悪するものもあれば、放棄不可能なものもあろう。身体化された知識・思想は、条件があえば自己増殖のように増える一方であり、もはや体の一部のように個人から完全に切除することができないのだ。従って、上記の引用では、教養のゼロ状態・無化状態への逆戻りの不可能性、自らが手に入れた知的能力は、着古した衣服のように捨て去ることができないのを、黒人種が石鹸で洗いたてようとしても膚色を洗い落とせない、ということになぞらえている。

注意すべきなのは、有島は第四階級が知識階級や第三階級に「上昇」することを否定してはいない点である。彼が主張しているのは、知識階級は本質的に第四階級になれるわけがない、なれると思ったら自己欺瞞だということである。つまり、有島自身は「黒人」だとしても、「第四階級」は「黒人」ではない。しかも、この文のニュアンスの力点は、人種主義的な発想にあるのではなく、「石鹸で洗い立てる」行為の徒労にあるのだ。繰り返していえば、有島は、階級規定を経済資本や集団意識のレベルから捉えるのではなく、事後的に見るとき、教育要素が剥離することはできないとして、この比喩を使っているだけである。これは確かに後天的に形成されたものだが、本間久雄は形成以前の過程を指すのに対して、有島は形成以後の現状を考えている。それは逆行不可能であり、そして絶対的差異として、知識階級の「無学化」、「第四階級化」を阻んでいるという。従って、階級一般、もしくは本質主義という視点から有島のこの論理を批判するのはやや的外れであるようにも思える。

もちろん、マルクスとエンゲルスは、「支配階級の一小部分は、この階級から離脱し、革命的階級に、すなわち未来をその手に担う階級に加担する」(『共産党宣言』第一章）と述べたが、アメリカの社会学者A・W・グールドナー（一九二〇～一九八一）は、「明らかにこのことは、「社会的存在が意識を決定する」というマルクス主義の基本的仮説と矛盾する。「支配階級」という社会的存在であった人々の間に、いったいどのようにして革命的プロレタリアの意識が生じえたのであろうか」[14] と反問している。確かに、この意味では、有島は当時の多くのマルクス主義者に比べて、より唯物論的だといえなくもない。

## 3．文化資本と寡頭制の鉄則

では、知識階級の「知識・思想」という絶対的な阻害物に固執することは、何を意味するのか。それは、諸刃の剣としての「知識・思想」が常に「文化資本」に変成していくこと、文化資本が常に権力に付き纏ってしまうことへの警戒にほかならない。当時のボルシェヴィキ知識人が政治闘争に没頭していた時、有島は文化資本の支配性・権力性に気付かずにいられなかった。文化資本は放棄不可能なものである以上、他者との区別としてのディスタンクシオン（優越性）に変身しかねないからだ。

知の中立性・客観性と知識人の階級的属性・利害関係とは、場合によって一致したり拮抗し

13）例えば標準語と方言のヒエラルキー、支配―被支配関係についてはこのように問うことができよう。
14）A・W・グールドナー『知の資本論――知識人の未来と新しい階級』（原田達訳）、新曜社、一九八八年、一二八頁。

たりする運命を強いられている。だが、多くのブルジョア知識人は「世界主義」や「普遍主義」を標榜し、意識的・無意識的に後者を覆い隠そうとする。他方、資本家やブルジョア知識人を攻撃するマルクス主義知識人は、実際において、意識的・無意識的に自らの文化資本を密かに増殖したものである。その両方にも、有島は批判の矛先を向けている。

いうまでもなく、文化資本を以て労働運動に奉仕してはならない、純粋な労働者にしか労働運動に従事する資格がない、というのは有島の本当の意図ではないだろう。これは自明の理である。ただ、自らの立場と存在の被拘束性をもっと自覚すべきだということを、有島は強調しているように思われる。

例えば、有島と親交を持ち、かつ有島から強く影響を受けた藤森成吉（一八九二～一九七七）は、東京大学独文科在学中にすでに作家デビューしたが、一九二四年五月から翌二五年五月末まで、実際に知識人の身分を隠して、一年間を通じて種々の肉体労働に従事していた。彼は石鹸工場、北海道の牧畜、東京郊外の豚飼い、遠州の織物工場、鉄工場、製糸工場の六種類の現場で一労働者として働いていた。藤森は有島の敗北的な死を直接の動機として、知識人の弱点を直視し、限界を打開するべく労働生活に入ったという[15]。しかし、結果はどうであろう。藤森の労働生活も一年間に限られ、所詮「労働体験」を獲得した人生一度の特殊な旅のようなものではなかったのか。しかも、この一年間の体験は結局彼の表象活動に素材を提供し、自らの文化資本をより豊かにしたにすぎなかった。彼はそれをルポルタージュにまとめ『狼へ：わが労働』という題で出版（春秋社、一九二六年）し、その後流行したプロレタリア文学の代表的作家の人生を歩んだ。労働者はあくまでも表象の対象としてしか存在し得ないこと、知識人の文化資本はとうてい放棄不可能であることは、まさに藤森の実践を通して裏付けられていた。

有島の言説によって、それまで水面下に抑えられていた知識人の文化資本そのものの諸性質が顕現され、クローズアップされるようになった。文化資本の階級性に盲目的な「学者、思想家、運動家、煽動家、頭領、作家、評論家」が、自らの社会的位置・イデオロギー性を問題化せずに第四階級を駆り立てようとする時、まさに「主義」と化した「知識・思想」は彼等の政治的武器になるのだ。

従って、第四階級の中から第三階級に「移動」できた者がいる場合、有島はそれを「支配階級と第四階級の私生児」と呼んでいる。「現在の思想家や学者の所説に刺激され一つの運動が起ったとしても、而してその運動を起こす人が自ら第四階級に属すると主張した所が、その人は実際に於いて、第四階級と現在の支配階級との私生児に過ぎないだろう」[16]。

有島の「私生児的第四階級」に向けられた眼差しは、かなり厳しい。「僕の言葉でいうならば第四階級と現在の支配階級との私生児が、一方の親を倒そうとしている時代である。そして一方の親が倒された時には、第四階級という他方の親は、血統の正しからぬ子としてその私生児を倒すであろう。その時になって文化ははじめて真に更新されるのだ」[17]。つまり、私生児は将来において打倒されるべきものである。なぜなら、「真の無階級の世界が開かれるために

15）松沢信祐「藤森成吉論――労働体験を中心に」（『日本文学』、一九七九年一月号）を参照。
16）有島武郎「宣言一つ」『有島武郎全集』第九巻、九頁。
17）有島武郎「片信」『有島武郎全集』第九巻、三九頁。

は、私生児の数および実質が支配階級という親を倒すに必要なだけを限度としなければならない。もしその数なり実質なりが裕かに過ぎたならば、ここに再び新たな容易ならざる階級争闘がひき起こされる憂いが十分に生じてくる。なぜならば私生児の数が多きに過ぎたならば、ここにそれを代表する生活と思想とが生まれ出て、第四階級なる生みの親に対して反駁の勢いを示すであろうから」[18]。

明らかに、有島が危惧したのは、革命の過程において出てきた指導者たちが新たな支配階層、抑圧関係を形成してしまうことであろう。聖典の解釈権を独占したかつての祭司階層のように、マルクス主義の正統的継承者だと自任し、革命の成果を横領する特権的な幹部層、代理人階層に、「私生児」たちは堕落することはないだろうか。そのような予見を支えたのは、有島のロシア革命に対する観察である。「彼らは民衆を基礎として最後の革命を起こしたと称しているけれども、ロシアにおける民衆の大多数なる農民は、その恩恵から除外され、もしくはその恩恵に対して風馬牛であるか、敵意を持ってさえいるように報告されている」[19]。

ボルシェヴィキ知識人、社会主義知識人指導者、更に一般的な政治組織に対する深い不信は、多くの労働運動において専制化、独裁化が絶えず起こることに由来している。有島と同世代のドイツの社会学者ロベルト・ミヘルスの主著、『政党政治の社会学』において提出された「寡頭制の鉄則」はそれである。ミヘルスによれば、「民主主義は組織の存在なしには考えることはできない」[20]。そして、「組織について述べることは、〈寡頭制への傾向〉について語ることである」[21]。組織の規模拡大に従って、必ず寡頭的支配形態が生ずる、という。それは「組織の頂上にいる少数者に権力を集中させてしまうことなしに、国家、労働組合、政党、教会などの大規模な組織を持つことができない、という現代人の解き難いジレンマ」[22] に起因する。つまり、指導者の知識教養・行政能力・宣伝資源と組織の一般成員のそれとの格差が次第に開き、支配的権力がおのずと強められていく。次に、一般成員が政治決定をするとき、ますます指導者を求め、指導者の地位を強化する役割を果たす。こういう免れ得ない傾向は「寡頭制の鉄則」だとミヘルスによって命名された。

だが、どうすればこの「寡頭現象の歴史的必然性」から逃れることができるのだろうか。ミヘルスは、民主主義による権力規制に希望を寄せているが、有島は始終自らの所属する階級の「文化資本」の「自覚＝自滅」の論理と倫理を徹底しようとする。

## 4．マルクス主義と教養主義との間に

以上、知識人の「知識・思想」が第四階級に向けられた場合の権力性、無学者への支配手段としての「文化資本」を見てきたが、「知識・思想」を脱政治化させる場合もあることを忘れてはならない。それは文化資本が普遍的な「教養」という称呼にすり替えられる場合である。

18）有島武郎「片信」『有島武郎全集』第九巻、三九～四〇頁。
19）有島武郎「宣言一つ」『有島武郎全集』第九巻、九頁。
20）ロベルト・ミヘルス『政党政治の社会学』（広瀬英彦訳）、ダイヤモンド社、一九七五年（原書初版は一九一一年）、二九頁。
21）ロベルト・ミヘルス、前掲書、三〇頁。
22）ロベルト・ミヘルス、前掲書、解説、四七九頁。

ここでは、マルクス主義知識人は「知識・思想」を硬直に主義化し、政治化したのに対して、教養主義知識人は「知識・思想」を観念的に個人化、脱政治化した、というふうに図式化してもよいかもしれない。そして、行動型・革命渇望型知識人と静思型・革命恐怖型知識人の狭間に彷徨した人の中には、まぎれもなく有島がいたのである。

有島は「宣言一つ」で、第四階級を代行できないので代行しないと宣言した。と同時に、「思想家としてのマルクスの功績は、マルクス同様資本王国の建設に成る大学でも卒業した階級の人々が玩味して自分たちの立場に対して観念の眼を閉じるためであるという点において最も著しいものだ」と解釈し、「私の仕事は第四階級者以外の人々に訴える仕事として終始する外はあるまい」と括った。彼を資本家にも労働運動にも与しないという教養主義者と異なった者にさせたのは、恐らく自らの属する階級の崩壊に尽力するという決意であろう。

有島は、一九二二年に東大学生の竹内仁の阿部次郎批判にも注目していた。竹内の文章は「リップスの人格主義に就て――阿部次郎氏のそれを批評する前に」(『我等』、一九二二年二月号)と「阿部次郎氏の人格主義を難ず」(『新潮』、一九二二年二月号)であった。有島はそれを、牧山正彦宛書簡(一九二二年二月十七日)で「中々読み応えのあるもの」と評価している。また、同年六月二十三日の秦秀雄宛書簡において、阿部次郎の非社会的な労働者観が「間違っている」とはっきり否定した。詳細な議論は伊豆利彦の「知識人の問題――「宣言一つ」前後」[23]で行われたため、ここでは省くが、以下、新しいテクストに即して有島と教養主義者との異なった立場を再検討してみたい。

事実、マルクス主義知識人に反して「政治的代行」を拒否した有島は、教養主義者を連想させるような「非政治的」な態度が表面的にはしばしば見られる。例えば、『現代』雑誌の一九二二年四月号に「余が代議士であったら」というタイトルのすぐ下に、有島は「代議士をやめます」という返事を書いている。有島は青年時代の反国家主義から晩年の無政府主義思想に至った過程において、議会政治も含めて、すべての制度に対して深い懐疑をずっと持っていた。そこは彼と民本主義・政党政治を全力で提唱した友人の吉野作造との分岐点であり、また文学者と政治学者との当然といえば当然の相違であった。

一九二一年十一月十一日、原敬首相刺殺事件への感想を求められた際に、有島は次のような「政治的な冷淡さ」を吐露している。

> 現在の私は、現在の政治というものには無興味だといって好い位興味を持って居りません。私が元来政治という問題に玄人らしい理解を持っていないというのも一つの原因ではあろうけれども、原因はそればかりではないように思っています。現在の国家がやっている政治は、私の生活とは多くの関係を実際に於いて持っていません。国会が開けても、選挙があっても、内閣が更迭しても、私にはそれが多分の意味あるものとして響いて来ません。これ程私を冷淡にしたのは私自身が悪いのか、政治家その人が悪いのか、それは他人の判断に任せるとして、兎にも角にも事実私に興味が持てないということだけは本当です[24]。

23)『日本文学』、一九七九年一月号。
24) 有島武郎「絶縁された電気の如く」『読売新聞』、一九二一年十一月十一日。

しかし、注意すべきは、上の有島の不平は字面通りにそのまま受け取ってはならないことである。なぜなら、原敬刺殺事件に応対する行為自身は、すでに彼の政治的関心を漏らしているからである。それに、有島の少なからぬ社会批評や文化評論、及び労働問題への莫大なコミットは、彼は広義な政治＝公共圏に眼を閉じているのではまったくないことを裏付けている。例えば、彼は大阪と秋田におけるロシア基金救済募金講演会に参加したし、賀川豊彦の大阪労働学校設立費、第一回国際婦人デー演説会の会場費、大杉栄の渡欧費、アナーキストたちの運動資金、『新興文学』、『熱風』、『赤と黒』諸誌の発行費など、多額の醵金を惜しまなかった。

有島は狭義な政治、つまり権力の運営・配分・競争・制限を中心とする国家政治の合理性を否定しているのでもない。「国会が開けても、選挙があっても、内閣が更迭しても、私にはそれが多分の意味あるものとして響いて来ません」という消極的な言葉の背景には、一九二一年頃、新段階に進展してきた「デモクラシー」の普選運動があったが、それに対して有島は無頓着ではなかった。

事実、前年の一九二〇年十二月五日の同じ『読売新聞』に、上の記事とほとんど矛盾しているかのような有島の談話筆記が載っている。タイトルはなんと「市議の選挙に普選を実行せよ」というものだった。全集の解説によれば、この談話筆記の背景として次のような事情がある。一九二〇年十一月に東京市道路工事に関する疑獄事件が発生、市長が市議会議長と共に辞任、翌十二月に『読売新聞』は、一般市民の絵葉書による市長と市議員の選挙特集を企画した。そして、有島は四十票で三十位となり、「最も被選挙者としての可能性の多い文学者」だと編集者に認定された。この談話筆記は、有島のこの選挙結果に対する回答であったという。

その中で、有島は東京市の行政をニューヨークのそれと比較し批判して、「市議会議員は市民の純正公平な代表者でなくてはならない。その意味で私は普選論者の一人である」とはっきり表明している。また、彼は自らの理想的な「選ばれる人」に、「市政に対する科学的研究の背景を有った人でありたい」といって、阿部磯雄、田川大吉郎、長谷川如是閑、吉野作造、大山郁夫、堺利彦の諸氏を「民衆の代表する点から言っても確かに適任者」だと同意しながら、自分に関しては、「平凡な常識しか有たない私ごときは、此の点で既に其の任でない事は申すまでもありません」と、議員になることを拒んだ。

久野収・鶴見俊輔もいったように、有島は「自己（或いは自己と同質のものの集団）の説得」へと進むようにしたのだ。また、藤田省三は久野収・鶴見俊輔の問題性を批評する中で、有島の観念論を積極的に評価した。彼は有島を白樺派の中において殆ど一人のみ、近代観念論の思想的抵抗力を発揮しえた者と見なして、「一九二〇年代の有島を一貫した観念は、「個性と燃焼生命の尊重」によって社会の「機械的制度」に対して内面的抵抗を敢行することであった」[25]と述べ、有島の「反制度」思想をこのように捉えている。「「個性からする制度への反抗」は、制度の意味を理解しているから生まれた観念である。だから、この制度観は、逆用すれば、積極的な制度を作り出す力にもなる」[26]。

25）藤田省三「『現代日本の思想』の思想とその批評――久野収・鶴見俊輔両氏の著書の問題性」（雑誌『思想』、一九五七年三月）、『天皇制国家の支配原理』所収、未来社、一九六六年、一八一頁。
26）藤田省三、前掲書、一八二頁。

藤田の「制度の意味を理解している」という指摘を裏付けるには、有島の次の発言がある。それは一九二一年三月に新人会の学術講演会において行った講演「ホイットマンについて」の一節であり、彼の痛烈な制度批判に付けられた但し書きであった。

> 私は人類生活に於けるインスティテュション存在の必要、従って主義に執着する傾向を有った人の存在の必要を否定しようというものではありません。主義とか理想とかいうもの、又それが結晶して出来上がったインスティテュションというものが、人類一般の進歩発達のためにどれほどの貢献をなし来ったかは充分高く値ぶみしても、まだ足りないものがあると言う事が出来ます。大体に於いて人間社会はこれらの人々、従ってこれらの人々によって改革され組織された制度によって今日までの程度に進歩発達してきたと言って差し支えありません。私はその功績を決して忘れているものではありません[27)]。

こうした認識によって有島は、通常の観念論者・教養主義者と一線を画したのだろう。「宣言一つ」以後の有島は依然として私有財産制度を攻撃し、政府の法令政策を糾弾し、教育・女性問題を批判し、また教養主義の代表的知識人倉田百三と労働問題をめぐって論争していた。これらの行動が示していたように、有島は「宣言一つ」を書くか否かにかかわらず、「第三階級に訴える」という理念を確実に実践していたといえる。

## 5．価値の衝突と正義のアポリア

しかし、もう少し深入りして有島における代行の問題を問う必要がある。つまり、体制維持的な御用知識人を批判し、急進的なマルクス主義知識人と背馳し、また閉鎖的に静思する教養主義知識人と同調することができないという有島は、いったい如何にして己の態度や言動の合理性・価値根拠を維持するのか。すなわち、有島は何に立脚して自分の選択が他の知識人のそれより正しいと肯定しえたのか。

なぜこのような途轍もない問いを立てるかというと、大正時代は近代日本における記念すべき思想の自由の小春日和であり、そこには各々の価値観、世界観が激しく競合していたからである。

例えば、総合雑誌『改造』の一九二〇年六月号には、「日本に於ける思想界並に文芸界の分野」という特集が組んである。この企画の狙いは勿論当時激動する思想界と文芸界の全貌を見極めようとすることにある。従って、編集者は「約三十の思想的系統を列挙して、其主義を主張して居る人、及特に其思想系統を深く研究して居る人を二通りに分けて」、当時活躍していた評論界の「五六人の御方」に返事を求め、その返答者の回答文を掲載したのだ。この特集はまさに今日の私たちに、一九二〇年頃の騒動した思想界・文芸界の俯瞰図を提供してくれている。その回答者の一人である文芸評論家生田長江の文章において、眩しいほどの「主義」項目と各自の代表的知識人が羅列され、大正デモクラシーの新段階における比較的自由な時代空気の中にかつて無い活発を見せた知識人たちの姿が鮮明に躍動し、百花繚乱の感が生ぜずにはいられ

27）有島武郎「ホイットマンについて」『有島武郎全集』第八巻、五三九頁。

ない。それらの「主義」を列挙すると次のようである。

マルクス派社会主義、社会改良主義、無政府共産主義、基督教社会主義、人道主義、トルストイアン、文化主義、人本主義、国家主義、アナーキスト、サンディカリスト、国家社会主義、ボルシェビキ、デモクラット、ニヒリスト、聖雄主義、資本主義、日本主義、温情主義、伝統主義、芸術主義（『改造』、一九二〇年六月号、五七～五九頁を参照）。

これらの「主義」の雑多な並存は、まさに大正期知識人の間に存するそれぞれの立場と価値観の相違・競争・衝突を端的に反映している。一九二〇年に起きた森戸辰男筆禍事件が示しているように、当時の言論環境はまだ厳しかった。だが、民間メディアの発達から見れば、やはり、一九二〇年代は明治時代の自由民権運動以来の二回目の思想啓蒙的な爆発期といっても過言ではないであろう。成田龍一の『大正デモクラシー』によれば、一九二〇年前後からの時期には、四つの社会改造思潮が見られるという。第一には、吉野作造を中心とする民本主義の継続と進展。第二には、大逆事件以後封じられた社会主義運動の復権。第三には、日本や天皇を前面に掲げて「国体」改造を目指す国粋主義団体の結成。そして第四には、国家や市町村が従来の統治方式を変え、新たな政策編成を試みること[28]。

いうまでもなく、各々の社会改造思潮＝思想系統にはまた、より細かい内部分岐が隠見されている。従って、当時の知識人たちは、必然的に、いかに己の価値観の正当性・正義性を主張し、他の価値観の持ち主に訴え、かつ他人を説服するのか、という価値観の闘争、マックス・ウェーバーのいう「神々の闘争」から逃れることができないでいた。

マックス・ウェーバーは、一九一九年に行った「職業としての学問」と「職業としての政治」という二つの名高い講演で、価値闘争から自由でありえない政治理念と価値中立的であるべき学問理念の衝突危機と、政治行為において「信念倫理」と「責任倫理」のどちらに従うべきかという「測り知れぬ深い対立」を痛切に提起した。だが、多くの大正知識人の独断的な文体には、自らの信奉する価値に対する無上の自信が溢れている（特に社会主義者はそうであった）。彼等は、「自分達の究極の意図が高貴なものである点は、攻撃されている敵の方にしても、完全な主観的誠実を持って全く同様に信じている」[29] ことを、少しも頭に入れていないようであった。

ちょうど『改造』が「日本に於ける思想界並に文芸界の分野」の特集を出した一九二〇年に、有島は「価値の否定と固定と移動」という文章を雑誌『人間』に発表し、価値の有無、価値標準の所在問題を考えようとしていた。彼はまず、人間の存在する世界は不可避的な価値的事実であると見なしている。「私達は価値の世界の中にあってはじめて生存の可能性を有し得るのだ」。そして、後に発せられた「価値標準の所在」という問いかけに対して、彼は三種類の回答＝見方を次のように仮定し分析した。

---

28）成田龍一『大正デモクラシー』、岩波書店、二〇〇七年、一〇四頁。

29）マックス・ウェーバー『職業としての政治』（清水幾太郎・清水禮子訳）、『ウェーバー　政治・社会論集』（世界の大思想23）、河出書房、一九六七年、四二二頁。

そのタイトルも示しているように、価値標準を否定するニヒリスト、価値標準を固定物と固執する理想主義者、及び価値標準の移動流転を信ずる者、という三つのタイプが取り上げられている。有島は第三の価値移動論に「一番共鳴を感ずる」と表明した。なぜなら、「自己が働く時、即ち所縁[30]との交渉を持つに至る時、何時、何所にでも価値は生まれるのだ。その力学的な意味に於いて世界は価値であるのだ。私達は所縁から切り離された自己の中に価値を見出す事が出来ない。又自己に臨まれない所縁の中に価値を索り出す事が出来ない。従って価値が生ずる為には自己と所縁及びその相互的交渉を必要とする」[31] からである。そして、自己と所縁の相互的交渉によって生まれる価値は、自己の中における常に流動的な価値標準を以て決定するという。

こうして、有島は自らのことを、密室に封じられているような非社会的な価値虚無者（或いは「所縁から切り離された自己の中に価値を見出す」教養主義派知識人）と、そして容易に硬直化してしまう価値絶対主義者（或いは「自己に臨まれない所縁の中に価値を索り出す」マルクス主義知識人）との間に微妙な一線を画した。つまり、価値を常に所縁＝外界＝他者との相互連関にしか見て取られないということである。

飛躍を憚らずにいえば、ここでの「価値」は「政治」と置き換えることができるであろう。アメリカの政治学者デイビッド・イーストンも、政治システムは「社会に対して行われる諸価値の権威的配分」として特徴づけている[32]。無論、有島は「諸価値の権威的配分」の背後に潜んでいる価値の希少性及び権力の支配に明らかには言及していないが、彼のいう「価値」の他者との関係的存在形態は、すでに今日の政治活動における知識人の正義根拠＝価値標準の相対的性質と一致していた。

例えば、有島のいう「固定的価値」に相当する現代概念の一つは、フランスの哲学者ジャン＝フランソワ・リオタール（一九二四～一九九八）の提起した「大きな物語」だといえよう。リオタールにとって、西欧のポストモダン時代において逝去せざるを得ない「知識人」とは、「人間、人類、国民、人民、プロレタリアート、生きとし生けるもの＝被造物、ないしはこれに類する何らかの実体的存在の立場に身を置いたうえで、すなわち、ある普遍的な価値をそなえた一個の主体の立場に自己を同一化〔一体化〕したうえで、その視点から、ある状況ないし状態を記述し、分析して、その主体が自己を表現するために、少なくともその自己実現の前進のために、何がなされなければならないか、を指示するような精神の持主である」[33]。有島はポストモダンの条件を予言したというわけにはいかないが、「第四階級」という絶対的価値に自己を同一化しないと同時にそれを放棄も超脱もしない、という姿勢は、現在の私たちにある種の「健全さ」を与えることができるのではないか。

「健全さ」といったのは、有島が二流の脱構築主義者であるように、基準というもの自体も認めないわけではないからである。有島はかかる虚無主義者・価値否定論者のことをこのよう

30）仏語。認識の主観である心に、精神作用を起こさせる客観を指し示す。
31）有島武郎「価値の否定と固定と移動」（初出一九二〇年）『有島武郎全集』第八巻、九九頁。
32）佐々木毅『政治学講義』、東京大学出版会、一九九九年、三九頁。政治学者デイビッド・イーストンのいう諸価値とは、有限性を媒介としている物質、名誉、地位などを指す。
33）リオタール『知識人の終焉』（原田佳彦・清水正訳）、法政大学出版局、一九八八年、四頁。

に表現している。「聡明な、従って生活に対して回避的な態度に傾く人々は価値標準の假象に過ぎない事を主張するに違いない」[34]。先にも引用したように、有島ははっきりと価値の存在を認めているのだ。「私たちの生活は各瞬間における当面の事象に対する価値設定の連続と見る事が出来る。単に評価という心理的過程がそうであるばかりでなく、評価によって他の事象から一つの事象を対象として選び取る事も、その選び取った事象に対して働きかける活動も、矢張り価値設定の圏外に逸し去る事は出来ない」[35]。

デリダは、「あらゆる法が脱構築可能なのは、正義が脱構築不可能だからである」、「脱構築はすでに無限の正義の要求によって賭けられ、拘束されている」[36] と明言している。しかし、脱構築不可能であることは、逆説的に構築不可能なことでもある。「法は常に己が正しいこと、正義であることを主張する。だがデリダにとって、法が正義と完全に一致することは決してない」[37]。高橋哲哉のこの解釈を展開すれば、そこから、「アポリアとしての正義」という概念が浮上してくる。法＝権利の形なしの正義はまったく現前できないがゆえに空虚であるし、逆に、正義なき法＝権利は常に特異な他者を置き去りにするために盲目にならざるをえない。正義とは存在しながらも、すべての一般法・実定法に包摂されえないものであり、決定不可能なものの経験である。デリダのいう「アポリアの経験」とはまったき他者との関係、固定化し自明化した主体や既成価値への破壊的かつ建設的な力、人間理性による暴力に対する絶えざる告発であるように思われる。そういうアポリアの経験＝不可能なものの経験のないところに、真の正義や責任は存在しない。従って、「正義がこうしたアポリアの経験である以上、ある人、何らかの制度、更にいかなる決定の瞬間であっても、そこに「正義それ自体」が十全に現前するというようなことはありえない」[38]。

こうした見解を参考にして、有島の批判対象となるマルクス主義知識人と教養主義知識人を考えると、二重の意味が開示されることになる。第一に、己の堅持する諸価値の正義性の永続性に対する自信過剰は、傲慢であり、僭越であり、暴力になる可能性もある。第二に、正義が十全に現前することがあり得ないからといって、直面している問題を無期限に回避すること、或いは無責任に傍観して知のディレッタンティズムに退行することは、知識人のニヒリズムを招きかねない。前者は知識人の主体性の肥大化や独断や尊大に繋がっている危険な経路であり、後者は不完全な正義意識において知識人の行動力の全面廃棄を防ぐ境界線であるといってよい。だが、両者間の相互転化はいわば紙一重の距離しかないため、知識人がいかにその二重性・両義性の狭間で注意深くバランスを取るかということは、極めて困難であろう。いうまでもなく、有島の苦しみもそこに大いに関わっている。

34）有島武郎「価値の否定と固定と移動」（初出一九二〇年）『有島武郎全集』第八巻、九九頁。
35）有島武郎「価値の否定と固定と移動」（初出一九二〇年）『有島武郎全集』第八巻、九九頁。
36）高橋哲哉『デリダ――脱構築』、講談社、二〇〇三年、二〇一頁からの孫引き。
37）高橋哲哉、前掲書、二〇二頁。
38）高橋哲哉、前掲書、二一四頁。

## 6．おわりに

以上見たように、究極的な価値判断の基準そのものは、知識人が自ら手にすることは何かの条件を付随しなければ、もはや不可能である。かといって、そういう「不可能なものの経験」こそ、正義の条件になっている。諸々のジレンマの洗礼を受けつつ、そのなかにおいて命懸けで全身全霊でもがき、困惑し、懐疑し、格闘したことがなければ、安易な「正義」に到達しても、その「正義」に復讐されることになるだろう。

あらゆる生活を一つのシステムに強引に当てはめようとする主義者を批判した有島は、なおさら敢えて流動的価値を主張する時、彼はまさにデリダのいう「アポリアの経験」に位置し、深く動揺しながら、正義の決断と行動の要請に自ら応答しようとしたのであった。一九二二年七月に、有島は個人もしくは国家による土地私有制度を「人類に大害をなす」として、自らの所有していた北海道の農場を「共有」という形で小作人に無償解放した。まさに彼の所属する支配階級に向かって、その自壊を促したのである。

要するに、正義のアポリア、つまり正義を実体的・永続的・固定的に占有することができないにもかかわらず、正義の現実的な要請に応答し決断しなければならないという難問を、有島は直覚していたはずである。いかなる手段を以て行動すればいいのかという問いに対して、彼は内面ばかりに退行する教養主義者の無責任、そしてともすれば党派性に暴走し他者の協働意識を強要する社会主義者の無自覚をともに批判し、自らを「永遠の反逆者」と任じて徹底的な「反制度」の立場を取ったのだ。

（原稿受理日　2019年９月29日）